

氏名	R・K
専修	国際開発農学専修
学年	学部3年生
渡航先	ベトナム
期間	2018/9/16～2018/9/22
内容	<p>9/16～9/22の日程で、ベトナムのホーチミンとカンターを訪れた。そこで得られた学びのうち、特に印象に残ったものを紹介する。現地に行って初めてわかる/感じるものであった。</p> <p><b>戦勝証跡博物館</b></p> <p>ベトナム戦争とその後の記録が残っている博物館を訪れた。そこに展示されている写真は、日本では考えられないような生々しいものであった。白黒写真だけでなく、カラー写真もあった。それどころか、ベトナム戦争の際の枯葉剤の影響で奇形になってしまった胎児（流産？）のホルマリン漬けも展示されており、「現実」を目の当たりにしたように感じた。</p> <p>ここで私は、「発信すること」について考えた。先にも述べたように、この博物館で展示されていたものは、どれも日本では考えられないほど生々しく、残酷なものであった。このような事実が過去にあったというのはまぎれもない事実であり、そのことから目を背けず、向き合うことは、我々にとって必要なことであるように思う。しかし、先に日本では考えられないとも言ったが、それらの写真や実物を見ることに耐え難い苦痛を感じる人が一定数いることも想像に難くない。日本であまり生々しい描写が許されていないのは、そういう人たちへの配慮もあるからだろう。しかし、このまぎれもない事実を、（例えば広島原爆ドームなどでも、なかなか生々しいものもあつたが）展示することは大切なのではないかと思う。少なくとも、今回このように実際に見る事ができたことは、私にとって貴重な経験になった。したがって、表現を規制するのではなく、見る側に選択権を与えるようにするのがいいのではないかと私は思う。見たくない人は見なくてもよい。しかし、現実と向き合いたい、見たいという人たちの思いが叶わないのは、おかしなことであるように感じた。（この博物館には選択権や注意の看板がなく、違和感も感じたが）日本でも、このような展示物が増え、そして見る/見ないの選択権が与えられるようになればいいと思う。</p> <p><b>メコンデルタ地域の農業</b></p> <p>メコンデルタ地域の農業について、現地の人から学び、実際に訪れた。メコンデルタ地域の特徴的な農法は、農水畜複合型農業である。水田において稲作だけではなく、同じ土地を利用してエビを養殖したり、近くの池で魚を育てたり、家畜を飼ったりして、それぞれを相互に関連させながら（ex.家畜の糞を堆肥にする）農業を成り立たせているのである。私たちが訪れた場所では、時期をずらして1つの土地でエビの養殖と稲作をおこなっており、このようにすることで地力を保っていた。</p> <p>稲の品種改良についても話をうかがった。日本との大きな違いは、毎年、栽培する種を更新している、という点だ。毎年新しく品種を改良し、それらについて病虫害への耐性、倒れにくさなどの観点から投票を行い、1位を決める。そこで優秀と判断された品種を栽培するのだという（日本では、一度確立された種はブランド化され、それがずっと続くのが一般的である）。品種改良をさかんに行うことは、環境への影響が危惧されることもあるのではないか、など疑問も生じる方法であった。</p>

